



7月

ほけんだより

平成25年度 第152号



子育て施設課

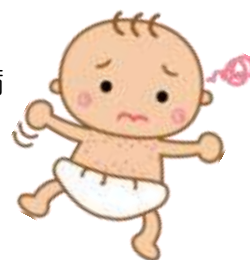
0823-25-3144

夏に注意する皮膚の病気

暑くなってくると汗をたくさんかくようになります。また、細菌やかびなども増えやすくなることから皮膚のトラブルが増えてきます。今回は夏場に起きやすい皮膚の病気をいくつか紹介します。

あせも(汗疹)

〔原因〕 あせもは汗のせんがつまり、汗が皮膚の中にたまっただめにでてくる病気です。そのため、温度・湿度が高いときに汗をたくさんかく部分にできてきます（ひじの内側・首・^{ひざ}膝の裏側など）。



〔症状〕

- ・^{しょうよう かんしん}晶様汗疹：ゴマ粒くらいまでの小さな水ぶくれができます。
- ・^{こうしょくかんしん}紅色彩汗疹：汗の腺にたまっただ汗がまわりにしみ出して炎症がおこり、赤い小さなぶつぶつができます。紅色彩汗疹はかゆみが強いいため、ひっかくことによって症状が悪くなり、細菌感染をおこし^う膿んだりすることがあります。

〔治療〕 あせもに対してはステロイドの塗り薬やかゆみ止めの飲み薬を使用します。かゆみのひどいときには病院に行きましょう。

以前はベビーパウダーなどを使用することがありましたが、厚くつけすぎると汗とまじってこびりつき、細菌感染を引き起こす可能性があるため、使用しないほうがよいでしょう。

治療の第一はあせもをつくらないようにすることです！

涼しく風通しのよい環境にし、入浴・シャワー浴をこまめに行ってください。また小さな子どもは寝ているときにたくさん汗をかきますから、衣類は木綿などの吸水性のよい物を使用し、汗をかいたときには着替えるようにしましょう。



とびひ でんせんせいのかかしん (伝染性膿痂疹)

〔原因・症状〕 虫さされや湿疹などのかゆみを伴う症状があると、そこをひっかいて傷ができます。汁が出るようになると、その部分に主にはブドウ球菌が感染して細菌の数が爆発的に増えます。

そのふえた細菌から外毒素というものがつくられ、皮膚を傷つけることで水ぶくれができてきます。その中にはたくさんの細菌がいるため、水ぶくれが破れて出てきた汁が外の場所やほかの子どもにつくと、同じような症状を起こして次々と感染していくため、『とびひ』と言われます。

〔治療〕 抗生剤の飲み薬と、塗り薬が基本となりますが、かゆいことが多いためステロイドの塗り薬を併用することがしばしばあります。

以前は傷があるときにはお風呂に入るのを禁止していた場合もありましたが、最近では逆にお風呂に入って傷を洗い、その場所にいる細菌を洗い流すほうが有効であると考えられています。



塗り薬のみで治すことは非常に困難ですので、かゆみがあり水ぶくれが出来るような場合には早めに受診しましょう。

みずいぼ でんせんせいなんぞくしゅ (伝染性軟属腫)



〔原因〕 伝染性軟属腫ウイルスによって引き起こされます。

〔症状〕 ゴマ粒から米粒の半分くらいまでの小さなぶつぶつができます。ぶつぶつの中央は少し白っぽく見える部分があり、つぶすと白い小さな固まりがでてきます。この固まりの中にたくさんのウイルスが入っています。

〔治療〕 治療の基本はピンセットなどでつまんで取ってしまうことです。その際に痛みを伴うことや、自然に治ってしまう子どももいることから、医師によっては無治療で構わないと考える人もいます。しかし、アトピー性皮膚炎のある子どもなど皮膚の弱い子では急に数が増えることがしばしば見られ、兄弟や友だちにもうつることが多いことから治療を行うほうがよいと思います。



最近ではピンセットで取る前に麻酔のテープを 1 時間くらい前に貼り付けておくことでかなり痛みを抑えることも出来るようになりました。数が少ないうちでしたら短時間で治療は終わります。

子どもの負担も少なく済みますので、水いぼを見つけたらできるだけ早く受診しましょう。

ほけんだよりは、呉市のホームページでもご覧になることができます。

URL <http://www.city.kure.lg.jp/~kodosise/hoken.html>